

# けものフレンズ—After stories—

鍵宮富雄(GIGANT GIGS)

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

初のけものフレンズ2次小説。

# 目次

1.	弱点	1
2.	お花見	42
3.	ずっと一緒	53
4.	嘘つき	66
5.	レズ	84



## 1. 弱点

サーバル「ねーねーかばんちゃん、これからおひるねしようよ！」

かばん「おひるね？」

サーバル「うん！」

かばん「いいよ。でも、どこでするの？」

サーバル「私のおきにいりのばしょー！このちかくにあるんだー。今日は天気もいいし、きつとすぐくきもちいいよ！」

かばん「お気に入り場所かー……いいね、ぼくも行きたい！」

サーバル「やったー！じゃあ私が案内してあげるね。ついてきて！」

かばん「うん！」

~~~~~

— 30分後 —

ガサガサ…

かばん「サ、サーバルちゃん……まだ着かないの？」  
サーバル「大丈夫！もーすぐだから！がんばって！」

ガサガサ…

サーバル「あ、ほら！見えてきたよ！」

サアア……

かばん「わあ……!」

サーバル「どう?すごいでしょ!」

かばん「うん! 広くて、風がすごく気持ちいいね!」

サーバル「でしょー! ここは「草原ちほー」って言うんだ!」

かばん「草原ちほーかあ……」

サーバル「天気がいい日はこうやって……みゃー!」ピョンツ

ドサツ

サーバル「ねっころがっておひるねするのがオススメだよ」ゴロゴロ

サーバル「ほら、かばんちゃんも!」

かばん「う、うん。……えいつ!」ピョンツ

ドサツ

かばん「……」

サアア……

かばん「きもちいい……」

サーバル「きもちいいねー」

かばん「サーバルちゃんはいつもここでおひるねしてるの？」

サーバル「ううん。ここはサバンナちほーからは遠いから、たまにしか来れないんだ」

かばん「そうなんだ」

サーバル「この前おひるねしたときは、気づいたら夕方になっちゃってたなー」

かばん「あはは。サーバルちゃんらしいね」

サアア……



サーバル「なんだかこうしていると、空をとんでるみたいだねー……」

かぼん「うん。このまま吸い込まれちゃいそうな、不思議な感じ……」

サーバル「トリのフレンズはみんなこんな気持ちなのかなー」

サーバル「あつ」

かぼん「どうしたの？」

サーバル「あの雲、ちよつとかぼんちゃんに似てるかも！」

かぼん「え、どれどれ？」

サーバル「ほら、あそこの……」

かぼん「えー。似てないよ」

サーバル「似てるよ！」

かぼん「どっちかと言えば、あれはサーバルちゃんに似てると思うな」

サーバル「そうかなー？」

かぼん「あの上に2つぴよんぴよんって出るのがサーバルちゃんの耳で……」

サーバル「ちがうよ。あれはかぼんちゃんのぼうしのはね！」

かぼん「いや、あれは耳だよ」

サーバル「はねだもん！」

かぼん「耳！」

サーバル「はね！」

かばん「むむむ……」

サーバル「ぐぬぬ……」

2人「……」

2人「ぷっ」

2人「あははははっ！」

かばん「どっちでもいいね」

サーバル「どっちでもいいや」

サーバル「それにしても、雲っていろんな形してるよね……なんでだろ？」

かばん「うーん……きつと、軽くてふわふわだからじゃない？」

サーバル「ふわふわ……いいな、さわってみたい！」

かばん「ぼくもさわってみたいな」

サーバル「ねー。トリのフレンズならさわれるのかな」

かぼん「どうかな。すごく高いところにあるから、もしかしたら届かないかも」  
サーバル「そっかー……」

かぼん「でも、いつかさわってみたいね」

サーバル「うん！ そうだね！」

サーバル「……あつ、あそこの雲、ジャパリまんみたい！」

かぼん「えっ？ ……あ、本当だ。たしかに丸くてジャパリまんみたいなの……」

かぼん「……ってそれじゃあ、丸い雲はぜんぶジャパリまんになっちゃうよ！」

サーバル「えへへ、そうかも」

かぼん「あんなにいっぱいジャパリまんがあつたら、食べきれないね」

サーバル「私なら食べられるよ！」

かぼん「えー、ほんと？」

サーバル「うん！ 私、1度に10このジャパリまんを食べたこともあるんだから！」

かぼん「すごいなー。ぼくは3こでお腹いっぱいになっちゃうよ」

サーバル「えっへん！」

かぼん「でもサーバルちゃん、あのジャパリまんは、10こよりもっとたくさんあり

「そうだよ？」

サーバル「ええっ！そんなに!？」

かばん「うん。たぶん、30こくらいあると思うな」

サーバル「うう、30こもかー……」

かばん「いや、40こかも」

サーバル「もー！結局いくつなの？」

かばん「いくつだろうね。数えてみる？」

サーバル「うん！やってみよー！」

2人「いち、にーい、さーん、しー……」

・ ・ ・ ・ ・

かばん 「さんじゆはち……さんじゆきゆー……よんじゆう！」

かばん 「ちようど40こかー……サーバルちゃんはいくつになった？」

かばん 「……あつ」

サーバル 「すー……すー……」

かばん 「……寝ちやつたんだ」

サーバル 「……」 スースー

かばん 「……」

サーバル 「……」 スースー

かばん「……」

かばん（きもちよさそうに寝てるなあ）

かばん「……」

サーバル「……」

サーバル「……」ピョコッ

かばん「……ふふっ」

かばん（耳がぴよこんってした……かわいい）

かばん「……」

サーバル「……」

かぼん（そういえば、サーバルちゃんの耳ってけっこう大きいよね）

かぼん「……」ジーツ

サーバル「……」

かぼん（それに毛が生えてて、ふわふわしてそうで……）

かぼん「……」

かぼん「……」ソーツ…

サーバル「ううん……」

かぼん「！」ピクツ

サーバル「……」

かばん「……」ドキドキ

かばん（や、やっぱりダメだね。起こしちやうかもしれないし……）

かばん（……でも）

かばん「……」ジーツ

サーバル「……」ピョコピョコ

かばん「……」

かばん（すごくさわってみたい……！）



かぼん「……」ウズウズ

サーバル「……」

かぼん（ちよ、ちよつとだけなら……いいよね？）

かぼん「……」

サーバル「……」

かぼん「……」ソーツ…

かぼん「……」チヨンツ

サーバル「……」ピヨコン

かぼん「！」

サーバル「……」

かばん「……」プルプル

サーバル「……」

かばん「……」サワツ

サーバル「……」

かばん「……！」サワサワ

サーバル「ん……」

かばん（ああああっ……）

かぼん「……♪」ナデナデ

サーバル「……」

かぼん（すごい……思ってたよりもかたいけど、でも毛がさわさわしてて……）

かぼん「……♪」サワサワ

サーバル「……」

かぼん（なんだか、くせになっちゃいそう……）

かぼん「……♪」スリスリ

サーバル「……」

かぼん「……」ツンツン

サーバル「……」ピョコッ

かばん「ふふふ……」

サーバル「んー……」

かばん「……♪」ナデナデ

サーバル「……」

かばん「……♪」サワサワ

サーバル「……」

サーバル「……かばんちゃん、なにしてるの？」

かぼん「!!」ドキッ

サーバル「……」

かぼん「あっ！えっと、その……！」アセアセ

サーバル「……」

かぼん「ご、ごめんねサーバルちゃん……起こしちやった？」

サーバル「……うん。だいじょーぶ」

かぼん「そっか……」

サーバル「……でも、なにしてたの？」

かぼん「その、ちよつとサーバルちゃんの耳をさわってみたくなっちゃって……」

サーバル「耳？」

かぼん「うん。ほら、サーバルちゃんの耳って大きくて、ぴよこぴよこしてるでしょ

?だから……」

サーバル「……」

かぼん「……ごめんね。いや、だった？」

サーバル「……」

サーバル「……いいよ。さわっても」

かばん「えっ？」

サーバル「……」

かばん「……いいの？」

サーバル「うん。ちよつとだけなら、へーき」

かばん「……」

サーバル「あ、でも、引っぱったりしちやダメだよ？」

かばん「うん」

サーバル「……」

かばん「……それじゃあ、失礼します」

かばん「……」サワツ

サーバル「んっ……」

かぼん「……」サワサワ  
サーバル「……」

かぼん「痛くない？」

サーバル「うん」

かぼん「……」ナデナデ

サーバル「……」

かぼん「……♪」スリスリ

サーバル「……」

かぼん「……」サワ…

かばん「……」カリッ

サーバル「ふみやあつ!!」ゾクゾクッ

かばん「!？」ビクッ

サーバル「うみやああ……」

かばん「えっ、ご、ごめん！痛かった!？」

サーバル「うう……」

かばん「あわわ……どうしよう、サーバルちゃんが……!」

サーバル「まって……ち、ちがうの」

かばん「え？」

サーバル「み、耳のうしろは……その、弱くて……」

かばん「……」

サーバル「うー……」

かばん「……もしかして、くすぐったかったとか？」

サーバル「……」コクッ

かばん「そうなんだ……」

サーバル「……」



かぼん「……」

かぼん「……」サワツ

サーバル「……っ」ビクツ

かぼん「……」ナデナデ

サーバル「……」

かぼん「……」スリスリ

サーバル「ん……」

かぼん「……」サワ…

かぼん「……」カリッ

サーバル「みやあああんっ!!!」ゾクゾクッ

サーバル「かばん ちゃん!!」

かばん「ご、ごめん。つい……」

サーバル「もー!おこるよ!」

かばん「ごめんねサーバルちゃん。もうしないから……」

サーバル「だーめ!そんなことするなら、もう耳はさわらせてあげないんだから!」

かばん「ええっ!?!」

サーバル「ふーんだ!」クルッ

かばん「そ、そんなあ……」

サーバル「……」

かばん「うう……」シユン

サーバル「……」

かぼん「サーバルちゃん……」  
サーバル「……」

サーバル「……」フリフリ

かぼん「！」

かぼん（こ、これは……）

かぼん「……」

サーバル「……」フリフリ

かぼん「……」ソーツ……

かぼん「……」モフッ

サーバル「みゃっ!?!」ビクッ

かばん「……」

サーバル「か、かばん、ちゃん……？」プルプル

かばん「……」

かばん「……」モフモフ

サーバル「……っ！」

かばん「……」モフモフ

サーバル「んんっ……」

かばん「……」モフモフ

サーバル「……」

かばん「……♪」モフモフモフモフモフモフモフ

サーバル「うみやああああっ!!」バシッ!

かばん「いたっ！」

サーバル「……」

かばん「……サ、サーバルちゃん？」

サーバル「……」

かばん「……」スツ

サーバル「……」サツ

かばん「……」

かばん「……」スツ

サーバル「……」サツ

かばん「……」

サーバル「……」

かぼん「……」スツスツスツスツスツ

サーバル「……」サツサツサツサツサツ

かぼん「……」スツ

サーバル「……」バシッ！

かぼん「いたっ！」

かぼん「もー！にげないでよ！」

サーバル「にげるよ！」

かぼん「せつかくモフモフできもちよかったのに……」

サーバル「だからって、激しくさわりすぎだよー！」

かぼん「えー……」

サーバル「しつぽは大事なところなんだから、もつとやさしくしなきゃダメ！」

かぼん「……じゃあ、やさしくならさわってもいい？」

サーバル「え？」

かぼん「お願い！あと一回だけでいいから！」

サーバル「えー……」

かぼん「……」ジーツ

サーバル「うう……」

かぼん「……」

サーバル「……」

サーバル「……しよーがないなー」

かぼん「！」パアア

サーバル「ちゃんとやさしくしてよー？」

かぼん「うん！うん！」コクコク

サーバル「あ、あと、しつぽのつけ根はさわちやダメだからね！」

かぼん「分かった！」ウキウキ

サーバル「ほんとかなー……」

かぼん「えへへー」ソーツ

かばん「……」モフッ

サーバル「……」

かばん「……♪」モフモフ

サーバル「……」

かばん「……♪」モミモミ

サーバル「みや……」ピクッ

かばん「……♪」サワサワ

サーバル「……」



かばん「……」ナデナデ

サーバル「ん……」

かばん「……」

かばん「……」ススツ……

サーバル「!?」

かばん「……♪」サワサワ……

サーバル「やつ、そ、そっちは……!」ビクビク

かばん「……」モミモミ……

かばん「……」モミ……

かばん「……」キュツ

サーバル「うみやあつ!」ビクツ!

かばん「……♪」モミモミ

サーバル「ふみやつ、あつあつあつ……!」ゾクゾクツ

かばん「……♪」フニフニ

サーバル「ふあああつ……か、かばんちや……!」ビクビクツ

かばん「……♪」サワサワ

サーバル「ん……ふつ……んううう……!」プルプル

かばん「……」モミモミ……

かばん「……」カリッ

サーバル「ふみやああああああっ!!!」ガバツ!

かばん「うわっ!」

サーバル「はあ……はあ……」

かばん「……」

かばん（き、流石にやりすぎちやったかな……）

サーバル「……」

サーバル「……っ!」キツ!

かばん「ひっ!」

サーバル「かーばーんーちやーん……?」ゴゴゴゴゴ……

かばん「あわわわ……ご、ごめんなさい……!」ガタガタ

サーバル「私、もうおこったからね……」ゴゴゴゴゴゴ……  
かばん「ごめんなさい……食べないで……!」

サーバル「言うこときかない悪いかばんちゃんは……」  
かばん「ひいい……」ビクビク

サーバル「こうだー!!」ガバツ  
かばん「うわああああ!!」

コチヨコチヨ……

かばん「……えっ?」

サーバル「うりやうりやー!」コチヨコチヨ



かばん「……」ゼエゼエ

サーバル「もうあんなことしちやダメだからね！」

かばん「は、はひ……ごめんなさい……」

~~~~~

— ゆうえんち —

かばん「……ということがあつたんです」

アライグマ「……」

フエネック「……」

かばん「あれからしばらくは耳もしつぽもさわらせて貰えなかったんですけど……最近また、ちよつとだけさわらせてくれるようになったんですよ！」

アライグマ「……」

フェネック「……」

かばん「久しぶりのしつぽはとつてもやわらかくてモフモフで、最高だったなあ……」  
ウツトリ

アライグマ「……」

フェネック「……」

かばん「……つて2人とも、なんでそんな変な顔をしてるんですか？」

フェネック「やー……なんというか……」

アライグマ「……ごちそうさま、つて感じなのだ」

かばん「？」

フェネック「それよりも、サーバルさんにそんな弱点があったなんて意外だねー」

アライグマ「確かに、びっくりなのだ！」

かばん「フェネックさんも、耳とかしつぽが弱かったりするんですか？」

フェネック「さーどうだろうねー」

かばん「……その、ちよつとさわってみたりしても」

アライグマ「ダメなのだ！フェネックに変なことをするのは、いくらかばんさんでも許せないのだ！」

かばん「ええっ!?へ、変なことって……」

アライグマ「フェネックのしつぽをさわれるのは、アライさんだけの特権なのだー！」

フェネック「あははー……そういうわけだから、ごめんねー」

かばん「うう……分かりました」シユン

アライグマ「かばんさんは、サーバルのしつぽをさわってればいいと思うのだー！」

フェネック「そうだねー……あ、噂をすればー」

かばん「え？」

サーバル「……」



かぼん「あつ、サーバルちゃん」

サーバル「……」

かぼん「……サーバルちゃん？どうしたの？」

サーバル「……」

サーバル「……かぼんちゃんは、耳としっぽがついてれば誰でもいいんだ？」

かぼん「え？」

サーバル「……」ムスーッ

かぼん「え、いや、その……さっきのはそういうつもりじゃ……」

サーバル「……」

かぼん「ただちよつと、さわってみたいなーって思っただけで……」

サーバル「そつかー……それなら、もう私のをさわらせてあげるのはやめようかなー」

かぼん「ええっ!? そんなあ！」

サーバル「ふうんだ。かぼんちゃんなんかしらなーい」プイッ

かぼん「ご、ごめんなさいサーバルちゃん! もうしないから……!」

サーバル「しらないもーん」

かぼん「あうう……」

サーバル「……」

かぼん「サ、サーバルちゃん……」

サーバル「……」

かぼん「うう……」

サーバル「……」

サーバル「……」チラッ

かばん「……」シユン…

サーバル「……」

サーバル「……もー、しよーがないなー」

かばん「!」

サーバル「今回だけ、とくべつにゆるしてあげる!」

かばん「本当!?!」

サーバル「うん。だから、そんなにしよんぼりしないで?」

かばん「わーいっ!ありがとう!」ギユツ

サーバル「うみやっ!?!」ビクツ

かばん「えへへー♪」モフモフ

サーバル「もー！急にさわったらびっくりするじゃない！」

フェネック「ははー……やっぱりねー」

アライグマ「フェネック？何がやっぱりなのだ？」

フェネック「サーバルさんが本当に弱いのはー、耳やしっぽじゃなかつたってことだよー」

アライグマ「えっ？じゃあ、どこが一番弱いのだ？」

フェネック「さーどこだろうねー？」

アライグマ「ええっ！教えてほしいのだ！気になるのだー！」

フェネック「まーまー……見ればわかると思っただけだなー」

アライグマ「わかんないのだ！教えてなのだ！」

フェネック「しよーがないなー。いーい？サーバルさんが弱いのはー……」

かばん「……♪」モフモフ

サーバル「……かばんちゃん、そんなに私の耳やしっぽがすきななの？」

かばん「うん！だいすきだよー」ナデナデ

サーバル「そっかー……」

サーバル「……えへへー♪」

かばん「あれ？サーバルちゃん、なんだか嬉しそう？」

サーバル「ううん、なんでもないよー！」

かばん「？」

サーバル「……♪」

n e x t .

## 2. お花見

かばん「それじゃあ、ボクたちはこれで」

サーバル「みんな、またねーっ」

かばん「……ふう」

サーバル「かばんちゃん、お疲れさま」

かばん「あはは、ありがとう」

サーバル「最近あちこちから声がかかっちゃってるね」

かばん「だねえ……」

サーバル「きつとみんな、かばんちゃんを頼りにしてるんだよ」

かばん「そうかな」

サーバル「そうだよ。絶対」

かばん「何だかサーバルちゃん、嬉しそうだね」

サーバル「え、そ、そう？」

かばん「ボクにはそう見えたかな」

サーバル「う、うーん。多分、なんだけど……」

サーバル「フレンズのみんなに、かばんちゃんが頼られてることが嬉しいんだ」  
かばん「それはボクも嬉しいけど、でもどうしてサーバルちゃんも？」

サーバル「え、えと、その……」

かばん「？」

サーバル「……私の大事な人がみんなの力になってるから、かな」

かばん「そうなんだ……。ありがとう、サーバルちゃん」

サーバル「……き、今日はこれで全部終わったし、帰ろっか」

かばん「うん。……あ、ちよつと待って」

サーバル「えっ？まだ何かあったっけ？」

かばん「今日はもう帰るだけだし、その前にお花見していかない？」

サーバル「おはなみ、つて？」

かばん「ええと、綺麗に咲いたお花をみんなで眺めるの」

サーバル「へえー。やっぱりかばんちゃん、物知りだね」

かばん「時間があれば図書館で本ばっかり読んでるからかな」

かばん「……それで、さっき聞いたんだけどこの近くにいい場所があるんだって」

かばん「サーバルちゃんさえよければ、これから行ってみない……？」

サーバル「もちろん行くよ！かばんちゃんと一緒だもん」

かばん「じゃあ、行ってみよう。ラッキーさん、お願いします」

ボス「ワカッタヨ、任せテ」

ボス「着イタヨ。話シテイタノハ、ココノコトダネ」

かばん「うわぁー……」

サーバル「すつ、ごーい……！すごい、すごいねっ！」

かばん「うん……。辺り一面ピンク色で……」

サーバル「私、こんな色した葉っぱの木って初めてみたよ……」

かばん「これは葉っぱじゃなくて、お花が咲いてるんだ。だからこの色は、お花の色」

サーバル「このピンクは全部お花の色なんだ……」

かばん「でも、どうしてここだけに集まっているのかな」

ボス「コノ辺リハ、フレンズト一緒ニ花見ヲ楽シメルヨウニシテアルヨ」

ボス「セツカクダカラ、サーバルト一緒ニ散策シテミタラドウカナ？」

かばん「え、いいんですか？」

ボス「ソノタメノエリアダカラネ。ボクハ、ココデ待ツテルヨ」

かばん「ありがとうございます。サーバルちゃん、行ってみよう」

サーバル「うんっ」



かばん「わあ……。すごいね、サーバルちゃん」

サーバル「うん……。どこを見てもピンク色のお花が咲いて、それがいくつも重なって……」

サーバル「何だかその中に私たちが埋まっちゃったみたいだね」

かばん「この中にだったら、埋まってみてもいいかも」

サーバル「ええー？ 例えばの話でほんとに埋まるのはちよつとなあ」

かばん「だってこんな素敵なお花に囲まれたら、きつと幸せな気持ちになるんじゃないかなって」

サーバル「それは、わからなくもないかな。眺めてるだけでも、ふわふわした気分になってくるから」

かばん「ただ、実際にやるわけにはいかないよね。咲いてるのをたくさんちぎってこなきゃだし」

サーバル「あはは……」

かばん「……あ、サーバルちゃん。あれ見て」

サーバル「あれって周りの木と同じ、だよな。同じ色のお花咲いてるし」

サーバル「だけど、あの木だけすごくおっきいね……」

かばん「どのくらいあるんだろうね……」

サーバル「さばんなにあった木より大きいかも……」

かぼん「ねえ、あの木の下で休憩していいこうよ」

サーバル「ちよつと疲れたし、そうしよつか」

かぼん「ふうっ……」

サーバル「綺麗だねー……」

かぼん「そうだねえ……」

サーバル「でも、何でこんな綺麗な色してるのかな」

かぼん「うーん……」

かぼん「……あつ」

サーバル「何かわかったの？」

かぼん「……このお花、ピンク色でしょ？ピンク色つて赤と白が混ざるとできるんだけど」

かぼん「砂漠の、ツチノコさんがいたところに赤いセルリアンがいたよね？」

サーバル「い、いたけど……」

かぼん「……さつきこの場所を聞いたときに教えてもらった話なんだけどね、実は」

かぼん「昔、この辺りに大きな赤いセルリアンが出たんだって」

かぼん「そのときはみんな協力してやっつけたから被害は出なかったんだ」

かばん「でも、倒したときに欠片がこの辺に弾け飛んだの……」

サーバル「か、かばんちゃん？何言ってるのかな……？」

かばん「今でもここに残ってる欠片とか、地面に染み込んだ何かをこの木は吸い上げて……」

かばん「白いはずの花がいつしかピンク色の花を咲かすようになったんだ……」

かばん「そして、満月の夜になると赤いセルリアンが……」

サーバル「に、にやーっ！ダメ、やめてっ！この話おしまいっ！」

かばん「……あははっ、ごめんね。嘘だよ、サーバルちゃん」

サーバル「……嘘？な、何だ、嘘かあ」

サーバル「もうっ。オオカミみたいなこと言うのやめてよ、怖いよーっ」

かばん「怖くてぶるぶるしてるサーバルちゃんが可愛かったから、つい」

サーバル「でも、かばんちゃんの話は嘘だとしてもこの色はどうやって出してるんだろうね」

かばん「お花をじっくり観察したことなんてあんまりないけど、見たことない色だよ  
ね」

サーバル「ほんとに最初は白かったのかな。それとも、これが普通なのかな」

かばん「今度図書館に行ったら調べてみようか」

サーバル「……ボスが色のついた水あげてこの色にしてる、とか」

かばん「な、何かやだなあ。色のついた水って」

サーバル「自分で言ったんだけど、ちよつと気持ち悪いかも……」

かばん「……不思議なところだね。ここ」

サーバル「不思議？」

かばん「素敵で、綺麗で、だけど今にも消えちやいそうな気がして……」

かばん「……まるでボクとサーバルちゃん、2人だけの世界になっちゃったみたい」

サーバル「あ、う……」

かばん「サーバルちゃん？」

サーバル「……何でも、ないよ。ただ、かばんちゃんと2人なのが、嬉しくて」

かばん「えっ？」

サーバル「最近、忙しかったでしょ。セルリアンとか、みんなのお願いとか、いろいろあつて……」

サーバル「こんな風にかばんちゃんと2人でゆっくりする時間、なかったから……」

かばん「うん……」

サーバル「だからね、私たち2人だけの世界で、2人きりでいられて、とつても嬉しいんだ」

かばん「そっか……。ごめんね、気づいてあげられなくて」

サーバル「気にしないで。かばんちゃんが頼られて嬉しいっていうのも、嘘じゃないから」

かばん「……それでも、気にしちゃうよ。だって、サーバルちゃんはボクの大事な人だもん」

サーバル「みやつ!？」

かばん「サーバルちゃん、ボクを大事な人って言うてくれたでしょ。それと同じ」

かばん「ボクの大事な人を、サーバルちゃんを悲しい気持ちにさせたくないよ」

かばん「サーバルちゃんには、どんなときも笑っていてほしいな」

サーバル「……えへへっ。ありがとう、かばんちゃん」

かばん「わっ……。どうしたの、肩に頭乗せてきたりして」

サーバル「……私ね、かばんちゃんとこんな風に過ごしてみたかったの」

サーバル「かばんちゃんと2人きりで、かばんちゃんと2人だけの場所で……」

かばん「それはさつきも言ってた、2人でゆつくりしたかったって……」

サーバル「……かばんちゃんと2人でゆつくりしたいっていうのは、本当」

サーバル「だけど、私が嬉しかったのはもっと大きな理由があるんだ……」

かばん「もっと大きな理由?」

サーバル「それをかばんちゃんに伝えようかって、ずっと迷ってたの……」  
サーバル「でも、こうしてかばんちゃんと2人きりで過ごして、ちゃんと話そうって思ってたんだ」

かばん「サーバル、ちゃん。その、大きな理由、教えてくれる？」

サーバル「……かばんちゃん。私、かばんちゃんのが好き」

かばん「……ありがとう。サーバルちゃん」

かばん「ボクも、サーバルちゃんのこと、好きだよ」

サーバル「違うの。私の好きと、かばんちゃんの好きは……」

かばん「違うじゃないよ。同じだって、言っただじやない」

サーバル「同じ……？じゃあ、かばんちゃんは……」

かばん「サーバルちゃんと一緒。ただひとつ違うのは、相手がサーバルちゃんってことだけ」

サーバル「……ほんと？ほんとにかばんちゃん、私のことっ」

かばん「うん。サーバルちゃんのこと、そういう意味で好き」

サーバル「そっか、そうなんだ……。私も、かばんちゃんも……」

かばん「……サーバルちゃん。手、握ってもいい？」

サーバル「う、い、いいよ。ちよつと意識しちやつて恥ずかしいけど……」

かばん「ありがとう。じゃあ……」

サーバル「あ、あれ？いつもしてるのとはちよつと違うね」

かばん「こうして指を絡ませて握ると、特別なものになるって本に書いてあったんだ」

かばん「ボクたちは、その。もう友達じゃなくて、特別になったから……」

サーバル「……何だか、手がすごくあつついね」

かばん「握った手の中に火があるみたい……」

サーバル「……好き。好きだよ、かばんちゃん」

かばん「ボクも。サーバルちゃんが、好き……」

サーバル「……ねえ、かばんちゃん」

かばん「なあに？」

サーバル「私たち、これからもずっと一緒だよ」

かばん「もちろん。ボクの隣は、サーバルちゃんだけの場所だから」

かばん「どんなことがあつたとしても、ずっと、ずっと一緒だよ」

サーバル「……このお花、次はいつ咲くのか私にはわからないけど」

サーバル「また、ここでおはなみをしようね。私と、かばんちゃんの2人だけで」

かばん「うん。約束だよ」

n  
e  
x  
t.

---



## 3. ずっと一緒

サーバル「かばんちゃん。ただいまーっ」

かばん「……」

サーバル「ごめんねー、待っててもらって。最近自分で走らなくて……」

かばん「……」

サーバル「思いつき走り回れて楽しかった……?」

かばん「……」

サーバル「かばんちゃん? かばんちゃんってば!」

かばん「うえっ!?!……さ、サーバルちゃん。帰ってんだ」

サーバル「もう。全然返事してくれないんだもん」

かばん「ご、ごめんね。つい夢中になっちゃって……」

サーバル「そんなに夢中になって、何をしてたの?」

かばん「えっと、これを読んでんだ」

サーバル「これって、本だよ。図書館にいっぱいある……」

かばん「うん。図書館に行ったとき、いくつか貸してもらって」

サーバル「へえー」

かばん「サーバルちゃんも見てみる？」

サーバル「……うーん。やっぱり私には何なのかさっぱりだよー」

サーバル「せめて絵があれば少しはわかるかもしれないけど……」

かばん「そういう本もあるから、あとで一緒に見ようね」

サーバル「ほんと？ 楽しみだなあ」

サーバル「でも、かばんちゃんはすごいなー。こんなにたくさん文字がわかるんだから」

かばん「そ、そうかな」

サーバル「そうだよー。私には変な形の模様には見ええないもん」

かばん「ちよつと恥ずかしいけど、でもサーバルちゃんに褒めてもらったのは嬉しいな」

サーバル「ねえ、このたくさん文字にはどういう意味があるの？」

かばん「これは誰かが書いた作り物の物語だね」

サーバル「作り物の、物語？」

かばん「そうだなあ……。例えばボクとサーバルちゃんの冒険みたいな本当にあったことじゃなくて」

かぼん「もしも図書館に向かわずにサバナで暮らしたら、を想像して書いたって感じかな」

サーバル「かぼんちゃんと一緒にさばんなで、かあ。何だか考えられないよ」

サーバル「それに私はへっちゃらだけど、かぼんちゃんにはあの暑さは大変なんじゃない？」

かぼん「あはは……。涼しくなるまで日陰でじっとしてるかもね」

かぼん「それにボクはどこかに住むのなら、湖畔や図書館の辺りが過ごしやすくていいなあ」

サーバル「あの辺りは私も過ごしやすかったな。思いつきり走り回れるし」

かぼん「と、そんな感じの誰かが考えたお話が書いてある本なんだ」

サーバル「ううー、何だかすつごくおもしろそう……。でも私はさっぱりだし……」

かぼん「大丈夫だよ。ほら、これならわかるでしょ？」

サーバル「絵がついてる……。もしかして、さつき言ってた？」

かぼん「うん、絵がついてる本。どうかかな？」

サーバル「これなら私にもわかるかも。あ、でもちよつとだけど文字もあるんだ……」

かぼん「そこはボクが読んであげるから。ほら、一緒に見よう？」

サーバル「わーいっ」

かぼん（……とは言ったけど、ボクもこれ読んでないからどういう内容なのかわからないんだよね）

かぼん（それにサーバルちゃんがものすごく近くて、何だか気になっちゃう……）

サーバル「かぼんちゃん？」

かぼん「あつ、ううん、何でもないよ。じゃあ始めるね」

サーバル「よろしくねっ」

『ここはジャパリパーク。ヒトとフレンズが仲良く暮らす大きな施設』

サーバル「ジャパリパークって、このことだよ。それを本にしたのかな」

かぼん「そうみたいだね。ヒトとフレンズさんが一緒に暮らしてるのかあ」

サーバル「ほら、早く続きっ」

かぼん「う、うん。えと……」

『大勢のヒトとフレンズが暮らすこの場所で、彼女はあの子に出会った』

『これは一人の少女とフレンズの、恋のものが』

かぼん「えええっ!？」

サーバル「わあっ!?!き、急に何!?!」

かぼん「だ、だって、だってこれっ!」

サーバル「この本？この本がどうしたの？」

かぼん「それは、その、えつと……」

かぼん「……さ、サーバルちゃん。恋とか、恋愛ってわかる？」

サーバル「なんとなくはわかるかな。誰かのことが特別好きってことだよね？」

かぼん「それはそうなんだけど……」

サーバル「……あ。もしかしてこれってそういう本なの？」

かぼん「う、うん」

サーバル「そ、そっかあ……」

かぼん「……」

サーバル「……」

かぼん「……べ、別のにしよつか。他にもいくつがあるから」

サーバル「かぼんちゃん。これ、続き読んでほしいな」

かぼん「えつ……」

サーバル「ダメ……？」

かぼん「だ、ダメじゃないけど……」

サーバル「かぼんちゃんと一緒なのは恥ずかしいっていうか、照れちゃうけど」

サーバル「私は、これが気になるな」

かばん「そう、なんだ……。じゃあ、続きから読むね……」

かばん（うう……。ただでさえサーバルちゃんが近くて気になってるのに）

かばん（一緒に恋愛のお話を読むなんて、すっごく恥ずかしい……）

かばん（何より、これ女の子同士で、余計にサーバルちゃんを意識して、ドキドキしちゃう……）

サーバル「この女の子、フレンズの子のことがとっても好きなんだね」

かばん「そ、そうだね……」

かばん（本の内容が恋愛だから、それに影響されてるだけ……。そのはず、なのに）  
かばん（ボクにはフレンズさんを想う女の子の気持ちが痛いくらいにわかってしまっ  
て……）

サーバル「あれ。ねえ、手を繋いでるけどこれって普通じゃないよね？」

かばん「これ、は……。すっごく仲良くなったらするやつで……」

サーバル「へえー。じゃあ、あとで私たちもやってみようよ」

サーバル「私たちだって、すっごく仲良しなんだから」

かばん「あ、う、うん……」

かばん（サーバルちゃんのこと好きだけど、そういう意味ってわけじゃ……）

かばん（さっきまではそう思ってたのに、今は絶対そうだと言えなくて……）

サーバル「わあ……。この子たち、抱き合ってる……」

サーバル「……えへへ、何か照れちゃうね。かばんちゃんと一緒にこの2人を覗いてみたいで」

かばん「あ、あはは……」

サーバル「……もうすぐで終わり、かな。めくってる方があとちよつとになってるし、お話も素敵な感じだし」

サーバル「ワクワク、じゃない。ちよつとドキドキしちゃう……」

かばん「あ……」

かばん（今のサーバルちゃん、すごく、すつごく……）

かばん（どう言ったらいいんだろう……。可愛いとか綺麗ってだけじゃなくて、それが全部混ざったみたいなの……）

サーバル「かばんちゃん。続き、読んで？」

かばん「……へっ？あ、えと……」

サーバル「……かばんちゃん？」

かばん（……無理、これ以上は無理！サーバルちゃんの前でこんな読めないよお！）

サーバル「だ、大丈夫？顔、真っ赤だよ？」

かばん「だいじょつ……!」

サーバル「ええっ!?ほ、ほんとにどうしたの、本に顔押しつけて」

かばん（ダメだ……。サーバルちゃんの顔、まともに見れない……!）

かばん（サーバルちゃんの顔見るだけであっつくなくて、すっごくドキドキして……）

かばん（やつぱり、ボク、サーバルちゃんのことを好きなんだ……。友達じゃなくて、恋の対象として……）

かばん（この女の子みたいに、ボクもサーバルちゃんが……）

かばん（……言うなら今しかない、よね。こんな機会、そうそうないだろうし）

かばん（ボクの気持ちを、サーバルちゃんにつ……!）

サーバル「あれ……?かばんちゃん、何で閉じちやうの?」

かばん「……サーバルちゃん。サーバルちゃんはボクのこと、どう思ってる?」

サーバル「どうって、友達だよ。とっても素敵で、仲良しで……」

サーバル「最高の友達だって、私はそう思ってるよ」

かばん「……うん、そっか」

サーバル「かばんちゃん……?」

かばん「ボクもサーバルちゃんのこと、仲良しの友達だって、そう思ってる。そう思っ



てた……」

サーバル「思ってた？」

かばん「……一緒に本を読んで、気づいたんだ。ボクと、この本の女の子は同じなんだって」

サーバル「ええと……？かばんちゃんは何が言いたいの……？」

かばん「……サーバルちゃん。ボクは、サーバルちゃんのことを、好き」

かばん「友達としてじゃなくて、この本の女の子とフレンズさんみたいな恋愛の対象として……」

サーバル「……えっ？」

かばん「ボクは、ボクはサーバルちゃんに……」

かばん「……恋を、しちやっただ」

サーバル「えっ……？え、えと、そう、なの……」

かばん「うん……」

サーバル「へ、へえ……」

かばん（ああ、何だかあんまりよくない返事……。やつぱり、ダメだったかな……。）  
かばん（それに勢いで言っちゃったけど、もしこれで嫌われたりしたらボクはひとりぼっちに……）

サーバル「……かばんちゃんは私と、その本の2人みたいになりたいよね？」

かばん「そう、だよ……」

サーバル「私ね、恋とか恋愛ってよくわかんないんだ。その、恋をして、恋をされてそのあとどうなるのかって」

サーバル「だけど、本の2人はとっても仲良しで、嬉しそうで、楽しそうで、それが少し羨ましくて……」

サーバル「本を見ているうちに、かばんちゃんとこの2人みたいになりたいって思ったの」

サーバル「かばんちゃんと一緒にいて、お話をして、触って、ドキドキしたい。物語の2人がしたこと全部、かばんちゃんとやってみたい」

サーバル「だってかばんちゃんは、たった1人の特別な人だから……」

かばん「サーバルちゃんっ……」

サーバル「かばんちゃん、私のことを好きになって、好きって言ってくれてありがとう。私、とっても、とっても嬉しいよ」

サーバル「私も、かばんちゃんが誰よりも大好きっ！」

かばん「じゃあっ……！」

サーバル「うん！私、かばんちゃんの……」

サーバル「……ええと、どう言えばいいのかな？恋をした同士は友達じゃないと思うし」

サーバル「とにかく、私はかばんちゃんと本の2人みたいな関係になりたいな」

かばん「……ほ、本当に？」

サーバル「もちろんだよ。どうして？」

かばん「その、ボクが好きって言ったあと、何だか気のない返事をしてたから……」

かばん「もうダメだって、嫌われたって思っちゃった……」

サーバル「わ、私はそんなつもりじゃなかったんだよ。ごめんね、怖い思いさせちゃって」

サーバル「心配しなくても、私はかばんちゃんが大好きだから。大丈夫だよ」

かばん「……あの、ね。ボクたちや本の2人みたいな関係を恋人って言うんだって」

サーバル「こいびと？」

かばん「うん。恋人」

サーバル「こいびと、かあ……」

サーバル「……何でかな。ちよつと恥ずかしいけど、でもそう言われて嬉しいんだ」

かばん「ボクもサーバルちゃんと、その、こ、恋人になれて……」

かばん「……とっても、嬉しいな」

サーバル「えっと、これで私たちはこいびと、になったんだよね？」

かぼん「ボクはそのつもり、だけど……」

サーバル「……えへへ。かぼんちゃんとこいびとになれたんだって思うと、ね」

サーバル「たくさん嬉しいと楽しいでいっぱい、私からこぼれちやいそうだよ」

かぼん「……そう言ってもらえると、ボクも嬉しいな」

かぼん「サーバルちゃん。ボクの恋人になってくれて、ありがとう」

サーバル「私も、こいびとにしてくれてありがとう。かぼんちゃんのこいびとになれて、すっごく嬉しいよ」

かぼん「……恋人になったら何をするのかとか、どうなるのかとか、ボクも全然わからない」

かぼん「でも、まずはこうして手を繋ぐことから始めよっか」

サーバル「これって、さっきの……」

かぼん「こうしていれば、サーバルちゃんと一緒にいられるね」

サーバル「かぼんちゃん……」

かぼん「サーバルちゃん。ボクたち、どこに行っても、何があっても、ずっと一緒だよっ」

サーバル「うんっ。ずっと、ずっと一緒にいようねっ」

n  
e  
x  
t.

---

## 4. 嘘つき

アリツカゲラ「いらつしやいませ、ろっじアリツカによろこそ〜！」

わたしはフレンズのアリツカゲラ。

このちほーでぐうぜん見つけたろっじの管理をしています。

あ、「ろっじ」というのは博士たちによるとお泊りができる場所のことらしいです。

キタキツネ「……まんぞく」

ギンギツネ「とてもいいサービスだったわ。わたしたちも見習わなくちゃ。またくるわね」

アリツカゲラ「ありがとうございます（ペコリ）」

おかげさまで最近はお客さまの評判もよく、遠くのちほーから来てくれるフレンズの方も多くなってきました。

ろっじは広いので一人でみるのは大変ですけどとてもやりがいがあります。

アリツカゲラ「さてと。次のお客さまのためにお掃除しないと」

だけど同時にとある問題もあつて……

????? 「きゃあああー!!」

アリツカゲラ「森の方から……もしかして!？」

くく夜の森くく

パンサーカメレオン「ひいひいひいひいひいひい (g k g k b r b r)」

シロサイ「なんですの誰ですのく!!」

バサツバサツ

アリツカゲラ「あのく、どうかしましたか？」

ヘラジカ「おのれえ、セルリアンか！わたしと勝負しろお！」

ブンブン

アリツカゲラ「わあつ、危ないですよ！わたしはただのアリツカゲラです、やめてくださいー！」

ヘラジカ「な、なに？それはすまない、てつきりさつきのくせ者かと……」

アリツカゲラ「くせ者？なにがあつたんですか？」

ヤマアラシ「わ、わたしたち合戦30回記念でろつじつてところに泊まりに来たんですう」

アリツカゲラ「わあ、わたしその管理人なんです。ありがとうございます〜！」

オオアルマジロ「よよよ、そしたら森から黒い何かが飛び出して『がおーつ』って……」

シロサイ「すつごくこわかつたですの〜！」

ハシビロコウ「……（コクコク）」

アリツカゲラ「やつぱりまたそうだったんですねえ」

カメレオン「ま、また？でござるか？」

アリツカゲラ「ちかごろこの辺りでみなさんと同じようなことがよくあるんですよ〜」

ヘラジカ「なんと！やはりセルリアンが!？」

アリツカゲラ「ろつじを開く前、ハンターの方に見てもらったところこのちほーにセルリアンはほとんどいないそうなんですが〜」

アリツカゲラ「しかしせつかく来ていただいたのにお騒がせして申し訳ないです……」



念のため周囲を見て回りますので」

ヘラジカ「では我々も共に行こう！」

オオアルマジロ「ええ!？」

ヤマアラシ「ヘラジカさま、わたしは怖くてムリですう〜！」

アリツカゲラ「わたしならこの辺りはよく知ってるので大丈夫ですから〜」

ヘラジカ「むむ、しかたない。我々は先にろっじに向かうとしよう」

ハシビロコウ「気をつけてね……」

アリツカゲラ「ありがとうございます。ろっじはこの道をまっすぐ行けばつきます

よ〜」

〜森の奥〜

アリツカゲラ「うう〜ん、とはいえもし本当にセルリアンならどうしよう……戦うのは苦手だし〜」

アリツカゲラ「あつそうだ！動物だった時にしていた自分を強く見せる方法、あれをやってみようかなあ」

ガサツガサガサ！

アリツカゲラ「誰ですかあ!？」

ガサツ

???? 「うー！がおーっ!!」

アリツカゲラ「!!」

バサアツ!

???? 「!!? うわああっ、おおきいい！（ドテツ）」

アリツカゲラ「う、うまくいきましたあ。急に羽を広げて威嚇するなんて久しぶり

……あれ？」

タイリクオオカミ「う、ううくん……」

アリツカゲラ「フレンズさん、ですか？」

タイリクオオカミ「うっ！し、しまった……まさかこちらがおどろかさるなんて……」

くくくくく

アリツカゲラ「それじゃあ、あなたがこの付近でフレンズをおどろかせていた犯人さんですか」

タイリクオオカミ「まあ、そういうことになるかな」

アリツカゲラ「堂々としてますね。セルリアンかと思いましたよ」

タイリクオオカミ「ハハハツ。セルリアンがしゃべるわけないじゃないか。いや待てよ、しゃべるセルリアン……アリだな」

アリツカゲラ「あのお。じゃあなんでみなさんをおどかしたんですか？こんな夜中に」

タイリクオオカミ「わたしが夜行性だし暗い方が恐ろしいだろう？きみも鳥だからてつきり夜目が利かず怖がると思ったんだが」

アリツカゲラ「鳥目といつてもほとんどの鳥はそこまで見えないわけじゃないですよ」

タイリクオオカミ「なるほど。使えそうなネタだ、覚えておくよ」

アリツカゲラ「じゃなくて、どうしてこんなことを？」

タイリクオオカミ「ふふふ、それはね……これを見たまえ！」

アリツカゲラ「？これは紙？絵ですか？」

タイリクオオカミ「少しちがうね。これはマンガとってお話になってるんだ」

アリツカゲラ「へえ、確かによく見るとなんだか物語になっててすごいですね！」

タイリクオオカミ「おもしろいだろうか？わたしはこれを描く作家というものになろうと思うんだ」

アリツカゲラ「なるほど。でもそれがどうしてビックリさせることに？」

タイリクオオカミ「わたしはホラーものを描きたいんだ！フレンズが恐ろしい目にあう話さ」

タイリクオオカミ「だけどフレンズは動物だった時とちがって本当の狩りなんかしないしみんな基本的に平和にくらしてる」

タイリクオオカミ「だからわたしはみんなをおどろかせてその顔をマンガの参考にさせてもらってるってわけ」

アリツカゲラ「それはいいですけどわたしのろっじのお客さんをおどかすのはかわいそうですよ〜！」

タイリクオオカミ「ああ、きみがあのもろっじのフレンズだったのか。あれがオープンしてから色んな子が来て執筆がはかどったよ」

アリツカゲラ「そんなあ〜！」

「タイリクオオカミ」……まあ今回はきみにつかまっちゃったし次からは少しひかえるよ」

アリツカゲラ「うう、やめる気はないんですか？」

タイリクオオカミ「これが中々たのしくてね。まあケガはさせないと誓おう……またな！」

バツ

アリツカゲラ「あつ！……もういなくなっちゃいました。すごい速さ……」

オオカミさんの言うとおり、それからろっじのお客さんが怖がることは減りました。

でもやっぱり時々そんな目にあうフレンズさんはいるようで……

わたしはお客さんはもちろん、オオカミさんがなんだか心配で森を見回ることが多くなりました。

そんなある日……

くく空くく

アリツカゲラ「はあく、今日もオオカミさんいないなあ。もう一度お話したかったんだけど……」

?????? 「きや、ガアーーーーー!!ガアーーーーー!!ガアーーーーー!!!」  
「うわああああつ!!」

……ドーンツ

アリツカゲラ「なつ、なんですか今の音は!?!?というか、二つ目の叫び声は……オオカミさん!?!」

くく森くく

バサツバサツ  
アリツカゲラ「あ、あれは……」

トキ「けほつけほつ、び、ビックリした……あら？アナタは？」  
アリツカゲラ「アリツカゲラです。あの、なにがあつたんですか？」

トキ「わたしはトキ。仲間を探してこのちほーに来てみたの。そしたら急に茂みから  
何かが出てきて」

トキ「……あまりにおどろいたから威嚇の鳴き声を出しちゃつたの。ごめんなさい、  
うるさくて」

アリツカゲラ「いえそれはいいんですけど……さっきの一つ目の声はトキさんだつた  
んですね」

トキ「ええ。急に出てきたのは大声をあげながら森の中に走っていったわ。そのあと  
何かぶつかった音がしたけど」

アリツカゲラ「やっぱり……！それきつとオオカミさんです、探さないと！」  
バサッ！

トキ「あつ、行っちゃつた……なんだつたのかしら」

〃〃森の奥〃〃

タイリクオオカミ「う、うう……（フラフラ）」

アリツカゲラ「……いました、オオカミさん！」

タイリクオオカミ「や、やあ……また、会ったね……」

バタツ

アリツカゲラ「あつ！大丈夫ですか！どうしてこんな……」

タイリクオオカミ「また……見慣れない子が来たからおどろかそうと思ったんだけどね……さっきの声、聞いただろ？」

アリツカゲラ「ええ、なんだかすごい声でしたけど……」

タイリクオオカミ「わたしは耳が良くてね……どうも、彼女の声はひどいダメージになったらしい」

タイリクオオカミ「あんまりびつくりしたもんだからあわてて逃げだしたら岩に思い切りぶつかって、このザマさ。もう走れない……」

アリツカゲラ「そ、そんな……！」



タイリクオオカミ「まあこれまでたくさんのフレンズをおどろかせた罰が当たったのかもね……しかたないさ……つてきみ!？」

グイッ

バサッバサッ

アリツカゲラ「しっかりとお願いしてください! すぐろっじに運びますから、そうしたらきつとだいじょうぶです!」

タイリクオオカミ「おどろいた……あんがい力持ちなんだなきみは……キツツキはあんなに小さい鳥だったのに」

アリツカゲラ「アリツカゲラです、よおーうーん! こんな今回だけですからね!」

タイリクオオカミ「そうだった……ありがとう、アリツさん……」

アリツカゲラ「オオカミさん……?」

タイリクオオカミ「わたしみたいなのを気にかけて……それに最後にこんな空の旅ができるなんて……」

アリツカゲラ「! 最後だなんて、そんな、ちよつとぶつかったくらいじゃないですか! 弱気になっちゃ……」

タイリクオオカミ「そうだな……どうせ最後なら……きみのおどろく顔が……みた

かっ…………た…………」

アリツカゲラ「え…………」

タイリクオオカミ「…………」

アリツカゲラ「そ、そんな、ウソですよね？」

タイリクオオカミ「…………」

アリツカゲラ「あんな、むだに元気でみんなをおどろかせてたオオカミさんが、そんな、死んじゃう…………なんて…………」

アリツカゲラ「オオカミさあーん!!返事をしてくださいよお!」

タイリクオオカミ「うん、なんだい？」

アリツカゲラ「…………へっ…………?」

タイリクオオカミ「いやあ空を飛ぶのは最高だね。あまりに気持ちよくて返事を忘れたよ」

タイリクオオカミ「それにしてもむだに元気とはひどいんじゃない」

ポロツ

タイリクオオカミ「あ」

アリツカゲラ「あ」

ひゆうううー

タイリクオオカミ「うわあああああああ!!?」

アリツカゲラ「オオカミさあぁーん!？」

くろつじく

アリツカゲラ「まったくひどいですよお！」

タイリクオオカミ「いやあ、ごめんごめん」

アリツカゲラ「いいえ、ゆるしません！あんなウソまでついて！本当におどろいたんですから！」

タイリクオオカミ「でもウソはついてないよ。ほら、ぶつかった時に足をくじいたから走るのはいくらもムリだ」

タイリクオオカミ「トキの声で平衡感覚も変になってたし。空を飛ばせてもらうのも一生に一度だろうしね」

タイリクオオカミ「どうせ最後ならアリツさんのおどろいた顔を見たいと思ったのも、本心さ」

アリツカゲラ「むむむ……」

タイリクオオカミ「ははっ、いい顔いただきました！あつ、いてて……」

トキ「ごめんなさい、わたしのせいで」

アリツカゲラ「トキさんがあやまる必要はありませんよ！オオカミさんの自業自得なんですから！」

トキ「そう？ならせめてお詫びに歌を歌おうかしら」

タイリクオオカミ「びくっ！いい、いやそれは遠慮するよ！」

アリツカゲラ「とにかく、オオカミさんはケガが治るまでここにいてもらいますから！もう無茶しちやいけませんよ？」

タイリクオオカミ「うっ、それじゃ誰もおどろかせられないじゃないか……」

アリツカゲラ「そんなことしなくていいですから〜！」

トキ「あら、誰かをおどろかすなんて簡単じゃない？わたしなんて歌を歌うだけでみんなびつくりするみたいだし」

タイリクオオカミ「それはきみだけ……いや待てよ。確かに直接おどかさなくたっていいわけだ……」

アリツカゲラ「……またなにか考えてます〜？」

〜しばらくして〜

タイリクオオカミ「……というわけで、パークは本当はセルリアンの女王が支配されていて……」

ギンギツネ「こわいこわいー！」

キタキツネ「ゲームの話みたい……もつと聞きたい……」

タイリクオオカミ「いい顔いただきました。そつちの子はけっこう強いね〜。じゃあ今度は……」

アリツカゲラ「オオカミさん、まーたそんな怖いウソばかりついて〜」

タイリクオオカミ「いいや、わたしは全部うわさを話してるだけさ」

アリツカゲラ「そのうわさの出どころはオオカミさんじゃないんですか?」

タイリクオオカミ「さあどうかな? まあ記憶まちがいくらいは誰にでもあるからね。そうだ、ある歴史的なマンガ家の名言にこんなのが……」

アリツカゲラ「もう消灯時間ですよ。みなさんまた今度にしましょう」

ギンギツネ「はい。ほら、キタキツネ行くわよ」

アリツカゲラ「ほらウソつきオオカミさんも。一日13時間は寝るんでしょう?」

タイリクオオカミ「夜行性だからへいきだけだね。しかしウソつき扱いは心外だなあ」

アリツカゲラ「いいえ、ウソつきですよ」

アリツカゲラ「だって、わたしはいつだって二人で空を飛んでもかまいませんから」

タイリクオオカミ「え? それって……あ、ちよつと待って!」

タイリクオオカミ「ねえ今また空を飛ばせてくれるって言った?」

アリツカゲラ「さあ、オオカミさんの聞き間違いでは？」

タイリクオオカミ「いやわたしは耳がいいんだそんなはずはないよ」

アリツカゲラ「うーん、オオカミさんがたのむならいいかもですけど」

タイリクオオカミ「ほんとに!？」

アリツカゲラ「でもそれだとオオカミさんはやっぱりウソつきになりませんか？」

タイリクオオカミ「あつ、い、いや最初にウソをついたのはアリツさんだから……」

アリツカゲラ「あはは、オオカミさんなんだか子どもみたいですよ」

タイリクオオカミ「うう……とにかくだね……」

---

next.

## 5. レズ

……

— ビーバーとプレーリーの家

コンコン

アライグマ 「こんにちはなのだ！」

フェネック 「こんにちはだよー」

ガチャツ

プレーリー 「やや、お客さんでありますか！」

アライグマ 「そうなのだ！ アライさんなのだ！

プレーリー 「では早速ごあいさつを！」 ガシツ

アライグマ 「へっ？」

実は聞きたいことがあつ



チューーーーーーッ

アライグマ「?!?!?!?!」

プレーリー「ん!」 チュツチュパツヌプツ

アライグマ「ん?!? んんうう?!? んんーーーーっ?!?!」

プレーリー「ぷはあ」

フェネック「……おおー」

アライグマ「な、な、……なにをするのだあーっ!」

プレーリー「これがプレーリー式のごあいさつなのであります!」

フェネック「なるほどねえー」

アライグマ「い、いきなり、びっくりしたのだ……」

フェネック「おやおやアライさん。顔が赤くなつてないかい?」

アライグマ「な、なつてないによだ!」

フェネック「かみかみだねーアライさん」

プレーリー「そちらの方もごあいさつを!」 ガシツ

フェネック「フェネックだよー、よろし」

チユーーーーーッ

プレーリー「んー」チユツチユパ

フェネック「……」

フェネック「ん」チユルチユパヌツヌポツ

プレーリー「んんんっ!?!?」

アライグマ「?!?」

プレーリー「あへっ……」フラッ

フェネック「ふうー」

アライグマ「ふえ、フェネック……?」

フェネック「んー? どうしたんだい? アライさーん」

アライグマ「な……なにをしてるのだ……」

フェネック「あいさつを返しただけじゃないかー。ひかないでくれよー」

アライグマ「……いや、どん引きなのだ……」

フェネック「ひどいなー」

フェネック「じゃあ」

フェネック「サライさんも、ちゅーしようかー。私と」

アライグマ「??!?!」

アライグマ「~~ね~~なんあなにえを言っへるのだあ!!?」

フェネック「ただのあいさつだよー」

アライグマ「ひっ!?! や、やめ、やめるのだ！ やめっ」

ガシッ

チュチュチュウー————

……

アライグマ「あひ……………あ……………」ポ……………

フェネットク「アラーイさーん。大丈夫々？」

アライグマ「ビクッ

フェネットク「アライさーん？」

アライグマ「……………ひ、ひどい……………ひどいのだ……………。なんでこんな、う、ぐすつ、こんなことを……………」

フェネットク「……………」

フェネットク「だつてアライさん。プレーリードッグとちゅーしちやつたじゃないかー」

アライグマ「それはつ、アライさんのいしじやないのだ!! 無理矢理に……………だいたい、そんなことなんの關係がつ」

フェネットク「私はずーっと、我慢してたのにさー」

アライグマ「へ……………」

フェネットク「ずるいよねー。いきなり、あいさつだーなんて言つて……………さあ」

アライグマ「ふえ……………フェネットク……………? なんか、目がこわいのだ……………」

フェネットク「ねえ、……………アライさーん」

アライグマ「ひ、ひいい! ご、ごめん! ごめんなさいなのだあ!! なにがわるいのか分からないけどフェネットクをおこらせたなら謝るのだあー!! ゆるしてほしいの

だあ!!」

フェネック「……………」

アライグマ「……う、……フェネック……?」

ナデリ

フェネック「よし、よし」ナデナデ

アライグマ「あ、あの」

フェネック「だーいじょうぶだよ。おこつてなんかないからねー」ナデナデ

アライグマ「ほんとに……?」

フェネック「ほんとだよー」

アライグマ「よかったのだ……」

フェネック「こつちこそわかったよ。こわがらせてごめーんねー」

アライグマ「べ、べつにこわがってなんて」

フェネック「仲直りに、お互い洗いつこしようかー」

アライグマ「洗いつこ!? アライさん、洗うの大好きなのだ!! フェネックのこと  
いっばいきれいにしてやるのだ!」

フエネック「ふふー、よろしくたのむよー」

ビーバー「大丈夫ツスカ!? しっかりするツスよ!!」

プレーリー「うう……やばいやつに手を出してしまったであります……」

ビーバー「もう、だれかれ構わずちゅーするの、やめたほうがいいツスよ?」

プレーリー「しかし、これが習性なので……」

ビーバー「……いつでも」

ビーバー「いつでもオレっちが、ちゅーさせてあげるツスから……」

プレーリー「ほ、ほんとうでありますか!?」

ビーバー「つていうか今でもおはようとおやすみのたびにちゅーされ」

プレーリー「んーっ」チューっ

ビーバー「んんうっ!」

プレーリー「それだけじゃ足りないであります! もつともつと、顔を見合わすたびにしましう!」

ビーバー「うー……もう、しよーがないツスねえ……」

プレーリー「えへへへ……」

……

—温泉

アライグマ「やめっひああ!!? そこはっだえっだめなのだあ!!」

フェネック「ほーらアライさん、こつちもきれいにするよー?」ワシヤワシヤワシヤ

アライグマ「ひぐううっ!!? しよこもらめなのだあっあっあっ!!」

ギンギツネ「あの……ここ、そーいう場所じゃないんですけど」

キタキツネ「ギンギツネ……あれ、なにやってるか分かるの……?」

ギンギツネ「えっ!?! そ、そっは……」

キタキツネ「……ギンギツネ、えっちだ」

ギンギツネ「なっ……!?! はあ!?!」

キタキツネ「ボクらも洗いつこ、する?」

ギンギツネ「し な い!!」  
キタキツネ「ちえつ」

アライグマ「はあつ、ひいつ……たすけてえ、かばんさーん！」  
フェネック「おやあ……アライさん。私と洗いつこしするときに、他の子の名前を出すなんて……」

アライグマ「へっ……？ あれ？ フェネック……？ なんかまた目がこわ」

アツーーーーー  
!!!!!!

豆知識

フェネックはキスを交わしながら交尾をするといわれています

そのキスの長さはなんと2時間以上とも言われています

因みに発情した雌のフェネックは異常に甘えん坊になるともいわれています



ペットとして飼ってても、いつか発情する場合もあるので  
飼い主の皆さん、覚えて下さいね。

---

e n d .